

嶋田

しまだ・ただし

忠さん



「嶋田忠ネイチャーフォトギャラリー」(蘭越)では、嶋田さんの作品が常設展示されている。
【入場無料/4月~9月:火曜定休、10月~3月:月・火曜定休/☎(29)3410】

プロフィール

■嶋田 忠(しまだただし)さん/大和在住/野生動物写真家/埼玉県出身。これまでに動物雑誌やテレビ番組の制作などに携わる。昭和55年に千歳市に移住。野鳥を中心に、国内外で撮影を続け、その作品は国際的に各方面から高い評価を得ている。

誰もがハッと驚くような鋭い眼光をこちらに向けるシマフクロウ。水中の獲物を捕らえ、飛び立とうとするアカシヨウビン。野鳥が見せる「静と動」の瞬間を捉えた写真からは、命の力強さを感じます。

野生動物写真家として、世界中で精力的な活動を続ける嶋田さんにお話を聞きました。

●カメラに触れたきっかけは?

「高校入学のお祝いに、母が突然カメラを買ってくれました。欲しかったことは1度もないので、未だにどうしてなのかわからないのです。当時、カメラはとても高価なものでしたから、母はかなり無理をしたと思います。カメラをくれた数か月後に、母はがんで亡くなりました。」

僕は、埼玉県の農村で、幼少期から動物に囲まれて育ち、特に、鳥へ

の強い興味と関心がありました。鳥の生態を夢中で観察し、どうやって捕まえられるのか、いつも計画を練っていたほどです(笑)。もっと鳥に近付きたかったでしょう。でも、カメラを手にしたことで、

僕の観察眼は、捕獲ではなく、撮影のために生かされるようになりました。観察を重ねて得たデータがなければ、奇跡のシャッターチャンスをもにすることはできません。

もしかすると、母は、自分の死期を知って《鳥は捕らえようと思わず、写真で撮りなさい》と言いたかったのかもしれない。母の思惑どおりかどうかはともかく、僕は、鳥の写真を撮り続けました。そのカメラが僕の写真家としての人生を決めたことは間違いありません。」

●千歳に移住した理由は?

野生に挑む写真家のまなざし

「誰も見たことのない瞬間を捉えたい」



「カメラマンとなった僕は、野鳥の撮影と雪への憧れから、北海道への移住を考えていました。撮影の合間に何気なく訪れた千歳で、千歳川と森の美しさに心を打たれて、《ここだ!》と。

当時は、追い求めていたアカシヨウビンの姿もあり、カメラマンを志すきっかけとなったカワセミや千歳の《市の鳥》であるヤマセミなど、私の愛する鳥たちがいて、まさに天国だと思いました。国際空港がありながら、車で数分走れば、ヒグマが生息する自然環境が広がる街なんて、世界でもほかに類を見ませんよ(笑)。」

●素晴らしい写真を撮り続けることができる原動力は何ですか?

「空を飛ぶ」という、人間を超越した能力をもつ鳥に対して、僕はずっと畏敬(※)の念を抱いてきました。偉大な彼らの生態をよりすさまじく、

美しく表現している、誰も見たことのない瞬間をカメラに捉えたいと考えています。

僕は、撮影の前に必ず絵を描いて、写真のイメージを作ります。自然の姿をそのまま切り取るのではなく、そこから感じた僕の心の感動を、いかに写真で表現できるかが勝負です。でも、作品の仕上がりには、いつも予測を超えた力がある。それが野生に挑む面白さです。子どものころからずっと鳥を見つめてきましたが、その探求心は、今も尽きることがありません。」

平成31年に、東京都写真美術館で大掛かりな個展を開催するため、オーストラリアやニューギニアなどで撮影を続ける嶋田さん。穏やかな笑顔の奥に、アーティストとしての鋭い眼光が潜みます。

※畏敬…心からおそれ敬うこと